「小チャイ」考

吉見孝夫

はじめに

形容詞語幹末の音節の分布をみると、いかなる音節もその位置にたてるわけではないことがわかる。たとえば、現代の共通語では語幹がエ列音で終わる形容詞は存在しないことが指摘されている*。古語では「アマネシ」「シヅケシ」等少なからずあったが、現代語では「アマネク」「シヅケサ」等、特定の用法が痕跡的に残っているに過ぎない。

＊川上蓁「発音から見た口語形容詞」（『日本文学論究』24号〈一九六五年四月〉）

語幹がチャ・チュ・チョで終わる形容詞も数少ない。我々が日常口にする語の範囲内では、「チイチャイ」「チッチャイ」の二語だけである。同義語といってもよい「チイサイ」があるにもかかわらず、なおかつ「チイチャイ」「チッチャイ」が使用されることを考えるならば、この二語の存在が極めて特異であることが了解される。

この小論は、この二語及びその連体詞形「チイチャナ」「チッチャナ」が、なにゆえ一般日常に使用される語として存続し得るかを考える。

1

この小論では、ある種の音韻と、それに結びついて喚起される印象との関係を道具立てとして、問題を分析する。その際に参考となるのが次の論考である。

鈴木孝夫「音韻交替と意義分化の関係について—所謂清濁音の対立を中心として—」（『言語研究』42号〈一九六二年〉）

この論文において、「日本語の所謂清濁の対立に於てみられる心理的な表現的価値（expressive value）の対立」が、擬容語以外の一般の語彙の中にも広く存在することが次のような実例で指摘された。

/tama/《玉、球状のもの》：/dama/《ダマ》

ダマとは粉などをこねる時、不手際のために出来る粒状のものを指す。また天婦羅などを揚げる際にころもの一部が遊離し

球状をなして浮び上るものも言う。すなわちダマとはタマの一種であるが歓迎されない不必要なタマなのである。

この論考では、その他「フレ（振れ）」と「ブレ」、「トリ(鳥)」と「ドリ」、「アフレル（溢れる）」と「アブレル」等の実例が列挙される。これらの実例と周到な考察とから次のように結論される。

現代日本語（東京方言）では擬容語以外の一般の語に於て、清濁音は何等表現価を持っていない。従って語の意味に無関係である。ところが /tama/ : /dama/etc. のように同一の指示対象（denotatum）を持ちながら相互に対立する一群の語に於ては、清濁音は夫々異なる表現価を持って対立し、語の含蓄的意味を区別するに役立っている。そこでこの場合 /t/ と /d/ は示差的と言える。然し指示対象が同一であるからには、指示的意味は同一であり、その限りでは /t/ と /d/ は示差的でなく、むしろ示同的に機能しているとみなし得る。このような音韻の対立は同時に二つの異なる意味の次元で、相反する方向に働くという二重の性格を持つものと言えよう。

ここでの分析は次の特徴を具えているものに限定される。

(1) 清濁の対立であること。（この論考では /n/ と /d/ の対立も示唆されているが、それをも含めて。）

(2) 対立する二つの形態が存在すること。

(3) 対立する二つの形態が含蓄的意味を異にしていること。

後述の議論を先まわりしていえば、小論では「小サイ」と「小チャイ」の語幹末音節の対立を問題にする。この対立は清濁の対立ではない。つまり(1)の条件をみたさない。この二語は(3)の条件をみたすほどには意味を異にしてはいない。むしろ同義語とみなしてよい。この二点で小論の問題には、鈴木氏の分析があてはまらない。

連濁もまた、この分析の適用範囲から、はずれる。従って「アカダマ（赤玉）」「クスダマ（くす玉）」が「＝ダマ」という形を持っているなかで、「白玉」が「シラタマ」であることは、指摘はされても解釈はつけ加えられない。これを説明するのが小松英雄氏の、表現効果に関する次の論考である。

小松英雄「アクセントの変遷」（『岩波講座日本語5音韻』〈一九七七年八月〉）

鉄クロガネ［○○○○］［観・僧上・一一三6］
銀シロカネ［○○●●］［観・僧上・一一三5］
金カネ　［●●］　［観・僧上・一一三4］

（角括弧内は観智院本類聚名義抄の所在を示す――引用者）において、「シロ＝」と「クロ＝」とは、ともに低起型ク活用形容詞の語幹であるから、同一のアクセントであるにもかかわらず、「クロガネ」は連濁を起こし、しかも、「カネ」の部分が［●●］から［＝○○］に変化しているのに対し、「シロカネ」は連濁を起こさず、また、「カネ」の部分も、もとのままに［＝●●］である。すなわち、「クロガネ」は十分に熟合しているが、「シロカネ」はまだその段階に達していないということである。「＝金」という構成からなる諸語がすべて「＝ガネ」となった中にあって、この語だけは『日葡辞書』に 'xirocane'、さらに下って『和英語林集成』（第三版）にも 'SHIROKANE' とあり、「シロガネ」になったのは最近のことに属する。したがって、この語には、類推による連濁をも拒否するなんらかの要因が強く作用していたものと推定される。それは、おそら

く、輝くような〈白さ〉の印象が、「カネ」の濁音化によって生ずるよどれを嫌ったからであろう。濁音のもつ表現効果についてここに詳述する余裕はないが、要するに、〈白き金〉という語構成意識が連濁を阻み、そして――、その後の時期における徴証を求め得ないが、少くとも平安末期までは――、アクセントの調整を起こしていないものと考えられる。

この論に従えば、「白玉」が連濁を起こしていないことは容易に説明される。

「表現効果」は、鈴木氏の分析からもれる現象のいくつかを解釈するのに有効となる可能性をやどしている。この小論の以下の論述も、筆者は「表現効果」の一応用と考える。ただし、「詳述する余裕はない」と自身ことわっているように、この引用だけからでは、表現効果に何が含まれ何が含まれないかは明白でない。従って以下の論述では、小松氏の真意からはずれることを恐れて、「表現効果」という語の使用は避ける。

2

この小論で問題にする語は「チイチャイ」「チッチャイ」「チイチャナ」「チッチャナ」である。いうまでもなく「チイチャイ」「チッチャイ」は「チイサイ」から、「チイチャナ」「チッチャナ」は「チイサナ」から生じている。

先ず、この四語の使われ方が、「チイサイ」「チイサナ」のそれと、どう異なるかを内省によって考えてみる。

(1) メタ言語のレベルでの使用を除いては、どのような文脈においても、「チイサイ」と「チイチャイ」「チッチャイ」とを、「チイサナ」と「チイチャナ」「チッチャナ」とを相互に交換しても、実質的な意味は変わらない。いわゆるニュアンスとか語感とかを無視すれば、「チイチャイ」「チッチャイ」は「チイサイ」と、「チイチャナ」「チッチャナ」は「チイサナ」と、それぞれ同義語とみなしてよい。

(2) 書きことばとしては、この四語は通常は避けられ、「チイサイ」「チイサナ」が採られる。

(3) この四語は成人間の会話に使用しても、ほとんど不自然に感じられない。

(4) この四語は敬体の文中に用いても、不自然に感じられない。

要するに、この四語は「チイサイ」「チイサナ」に比較すると、正格ではないと感じられるが、その使用がただちに違和感を聞き手に与えるということもない。書きことばとしては避けられるといったが、用例を捜すことができなくはない。

あんたは普通の男とちよつと違ふと思つたけど――ちつちやい悪魔のやうに女はしやべり続けた。(高見順『故旧忘れ得べき』〈一九三六年一一月〉――特選名著複刻全集近代文学館による)

また特定の性、特定の階層、特定の年齢層のみに使用されるということもない。以上の点から、この四語は、使用層を選ばないという条件をみたす意味で、十分に一般的な語だということができる。

3

3.1 「チッチャイ」「チッチャナ」の促音を無視すれば、この四語と「チイサイ」「チイサナ」の相違は語幹末音節の相違である。「チ

イサイ」と同様に語幹がサで終わる形容詞には「浅イ」「臭イ」等がある。試みにこれらの形容詞の語幹末のサをチャにおきかえてみよう。

アサイ → アチャイ
クサイ → クチャイ
……

当然このような改変を行えば、まともな日本語として、もとの意味を保持することはできない。この点では、サをチャ以外の他のア列音の音節におきかえたとしても同様である。たとえばサをラにおきかえてみよう。

アサイ → アライ
クサイ → クライ
……

これらは到底まともな日本語として、もとの意味を保持することはできない。その点ではチャにおきかえることも、ラにおきかえることも、異ならないようにみえる。

しかしチャにおきかえることは次のような特徴を持つ。

(1) 改変によっても同音異義語と衝突しない。

(2) 「アチャイ」「クチャイ」等は、甚だ舌足らずに感じられるけれども、〈浅い〉・〈臭い〉等の意味を保持して使用されることがある。

(1)・(2)は密接に関連するというのが筆者の主張の一つであるが、(1)に関連して先ずチャの分布を考えてみたい。

3.2 チャは、その分布に偏りがみられる。通常は外来語・字音語・擬音語・擬態語においてあらわれ、いわば〝由緒正しい〟和語には決してあらわれない。それ故

A 形容詞語幹末に限らず、サをチャにおきかえても同音異義語と衝突する心配が少ない。

B チャはサ程には正格ではないと意識される。

五十音図で同じ行に配置されるチュ・チョの分布にも同じ偏りがみられる。それ故、スをチュに、ソをチョにおきかえても同音異義語と衝突する心配が少ない。チュ・チョはス・ソ程には正格ではないと意識される。

Aに関して

『江戸評判娘揃』〈明和六年序〉に次のような茶尽しがある。

何にを茶は〳〵と茶はくわしい。茶かで此くらゐの娘盛は外に御茶らぬ茶かいもひくいも今を茶かりのおよし茶〳〵とより茶わりに。茶か〳〵敷御評判茶りとは。し茶はせなしぜんと御名も茶かく茶かい町でも。茶がて狂言に茶しませうと茶ま〳〵見る人はこしがぬけて茶くれぬとぼうずあ茶まをぶら茶らして寝茶り起き茶り茶くの入道見るごとく茶わいせうねはご茶りませぬそれにべら茶ら〳〵と茶くらむせうに口を茶べつてあ茶まを茶くいてか茶を茶(もや)そならてんてん日でりが茶。茶しかけてい茶茶らば抔と一口唄で茶のしまれますひやうしに汲(くん)で出す茶をこぼしおつとかてんぢや茶こぼしまの。弁天茶まと茶れころす程。茶わがれます茶かりの娘は此御茶屋外にはない茶と申茶れますは茶て〳〵きつひ茶ね〳〵（東京都立中央図書館加賀文庫蔵写本による。印刷の便宜上、漢字に付された濁点は省略。）

ここではア（「し茶はせ」が、「シヤワセ」の改変ではなく「シアワセ」の改変であるならば）カ・サ・タ・ヤ・シャ等のア列音がチ

ャにおきかえられている。この茶尽しが容易に理解されるのは――本来の形に容易に復元できるのは――、同音異義語と衝突しないからであろう。同様の茶尽しは『東海道中膝栗毛』三編下〈享和四年刊〉にもある。

そこでちやばかりながら。どなたもちやよふ。（中略）ちやれやれ。ちやりとはちやわいもないことを。ちやべらしやる。ちやつきからのんだはちやばかり。ちやとうしゆのちやけを。ちやくぶくしたおぼへはごちやらぬ。わるいちやれだ（版本による）

サ・タ・ハ・ヤ・シャ・ザのア列音がチャにおきかえられている。

Bに関して

サと比較してチャが正格でないと意識されていたと主張するとき、次の例がその主張のささえとなろう。

一　利口成者の咄しに茶道坊主といふ言葉をそばにゐける人聞ていふ様は尤ちやを立るなれ共あれはさだうといふ物じや惣じて茶にはさといふこと葉を用とをしえければ彼者が云それは其方の申されやう無理也さとちやと同じことならば笹屋の三郎兵衛を茶〳〵屋の茶郎兵衛といふても大事ないかと云た（『軽口露がはなし』巻之一「第五茶といふ言を利口に取なをす事」〈元禄四年刊〉――東京大学霞亭文庫蔵本による）

この咄の面白さはどこにあるのだろうか。それは、ただ甲という名が乙という別名に変わってしまうということではないだろう。

ところでこの咄の「彼者」のいい分には無理がある。「そばにゐける人」は、「茶にはさといふこと葉を用」いることを主張したのであり、従ってそれに反論するには、チャをサにおきかえるならば不都合が生じる事例を挙げなければならない。「彼者」は「茶〳〵屋の茶郎兵衛を笹屋の三郎兵衛といふても大事ないか」といわなければならないところである。そこを咄の作者は「さとちやと同じことならば」という大雑把な論理で無理押ししている。このような無理を作者が通さねばならなかったのは、「茶〳〵屋の茶郎兵衛」が「笹屋の三郎兵衛」に変わるのでは読者は笑えないからである。

この咄の面白さは、「笹屋の三郎兵衛」というれっきとした名が「茶〳〵屋の茶郎兵衛」という、名前らしい形はとっているが実在しそうもない滑稽な名に変じてしまうところにこそあるのだろう。そしてこの名のもつ滑稽さは、一つにはチャという音に対する人々の意識にかかわっていよう。

3.3　〈浅い〉・〈臭い〉の意味で、「アチャイ」「クチャイ」を使用するのはどの様な場合であろうか。それは幼児の話す言葉を写すときである。また幼児に対して話しかける成人もこれらを使う。形容詞語幹末に限らず、サに対応する幼児の舌足らずな発音を――音声学的にどう表わされるべきかはともかくとして――、我々はしばしばチャと聴き取る。また、幼児に向かって「きょうはちゃむいでちゅよ（今日は寒いですよ）」といったりもする。チャがサに対応するのと平行して、チュがスに、チョがソに対応する。

＊これが、幼児の未発達な発声器官のもたらす自ずからなる発音の実相を伝えていると主張する気はない。むしろ3.2で挙げたA・Bの特徴を具えるチャ・チュ・チョが幼児らしさをかもしだすために選ばれたというのが事実に近いだろう。だから以下でいう幼児語とは、幼児が話す言葉であるよりは、幼児に向かって話される言葉であり、せいぜいのところ、

それをまねて話す幼児の言葉である。

この対応から推して、この小論で問題とする「チイチャイ」等の四語は幼児語に由来すると考えられる。

管見に入った、四語の最古例を挙げよう。

ある百性親子づれにて年貢の米をうしにつけお代官へおさめ戻りかけにとなり村の明神の杜へはいり絵馬堂にこしかけ火打コチ〳〵むすこはうろ〳〵絵馬を見まわり司馬温公が壷破てゐる絵を見てがてんゆかねばとさん〳〵アノちつちやい唐子がつほわつてゐるゑんまは何じやヤ親仁どれ〳〵ウヽあれかありや唐の十夜の晩じや（『滑稽即興噺』巻之五「画馬」〈寛政六年刊〉——大東急記念文庫蔵本による）

この例では、「チッチャイ」は息子が使用する語である。年齢は不詳であるが、内容からみて少年であろう。これは「チッチャイ」が幼児語から一歩ぬけでた段階を示している。

またこれらの語が成立したと思われる近世後期には既に、サ・ス・ソに対応する幼児の発音を、チャ・チュ・チョで表す習慣があったであろうことが次の例で推測される。

十五六の山出し下女と三歳ばかりの小児をつれ来たり（中略）徳「叶屋福助。怜。徳松（式亭三馬『浮世風呂』四編下〈文化一〇年刊〉——版本による）

「チイチャイ」等四語がここでいう幼児語から生じたことが了解されるならば、ここでの課題は、「アチャイ」「クチャイ」等が幼児語であるにとどまるのに対して、「チイチャイ」等四語がなにゆえ一般的な語になり得たか、となる。

4

幼児らしさを表す手だてとしてチャ・チュ・チョが利用されることがわかった。「浅イ」を例にとろう。

アサイ → アチャイ

下段は「子供っぽい」「幼い」「可愛らしい」といった語感を伴うことになる。そしてそれ故に成人間での使用語彙からは排除される。

ところで「子供っぽい」「幼い」「可愛らしい」に付随する印象は、「小さい」につきまとう印象と重なり合う部分がある。子供はしばしば「小さい」と形容され、可愛らしいものは小さいものであることが多い。次の例文の場合、「小さい」は「幼い」とほぼ同義ですらある。

コノ子が小サカッタ頃ハ、腕白デ苦労シマシタ。

「チイサイ」と「チイチャイ」を対比させてみよう。

チイサイ → チイチャイ

下段は、「子供っぽい」「幼い」「可愛らしい」といった語感を伴い、結局はそれ故に成人間の使用語彙からは排除されるはずである。しかし今挙げた語感を伴うが故に、「チイチャイ」はその表す意味に似つかわしい語形でもある。「チイサイ」に代えて「チイチャイ」といえば、舌足らずには感じられるが、〈小ささ〉を印象深く伝えることができる。ここに「チイチャイ」が——同様に他の三語も——成人間でも使用し得る語として存続する理由があると考え

「シロカネ」は〈白さ〉の印象故に「シロガネ」と連濁すること

を拒否した。一方「チイサイ」はその意味故に「チイチャイ」の存在を許容したといえよう。

5

チャ・チュ・チョを含む語形と意味との関係に関連して補足的な事柄を述べる。

5.1 チャマ・チャン

接尾語の「チャマ」「チャン」が「サマ（様）」「サン」出自であること、そしておそらくは幼児語として成立したと推測されることにくだくだしく説明を加える必要はないであろう。「チャマ」はしばらく措くとして、「チャン」には

○ 比較的低年齢層で使われることが多いが、成人間にもその使用がみられる。

○ 特に親族名称に付く場合には、その使用に対する抵抗感が減少する。

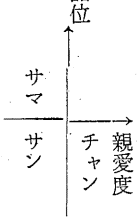
といった点を指摘することができ、その意味で「チャン」もまた、「チイチャイ」同様、一般的な語ということができよう。ただしこの場合には、「チイチャイ」とは異なって、その意味によって「チャン」の広い用いられ方を説明することはできない。

おもうに――文献上にその徴証を跡づけることは困難であるが――、それは親族名称に付くことと関係してこよう。家族内では家族の最年少者の立場からみた親族名称を使うことがある。*子を持つ親が自身の配偶者を「オトウサン」「オカアサン」と呼ぶように。家族内の最年少者とは先ず幼児である。幼児は幼児語の原則に従って、「サン」のかわりに「チャン」を使用させられる。次に成人は、親族名称の原則に従い、最年少者の立場に立って「チャン」を使用する。このような経過をたどって「チャン」は家族内で広く親族名称について用いられるようになったと考えられる。そこから更に、「チャン」は「サン」に親愛感・身近さを付与した印象を与えられ、親族名称に限らず、特に親しみを込める場合に成人間でも用いられるようになった。

*鈴木孝夫「言語と社会」『岩波講座哲学11言語』（一九六八年一〇月）

「サマ」に由来する「チャマ」もほぼ同様に考えられるはずだが、「チャマ」は「チャン」程には一般的ではない。たとえば、親疎にかかわらず、友人知人をチャマづけで呼ぶことは、はばかられる。

「サマ」と「サン」とを比較すると、大づかみには品位の高低と把えられる。また「サン」と「チャン」とを比べると、大雑把には親愛度の高低と把えられる。すると「サマ」「サン」「チャン」の三語を次のように配置することができる。あいている場所に「チャマ」が入る。



「サマ」と「サン」の差を、品位の高低と今把えたが、「サン」は決してぞんざいな印象をもつわけではない。「サマ」の現在の使われ方を挙げてみよう。

(1) 書簡類の宛名に用いられる。

(2) 商取引上の顧客を遇する時に用いられる。（デパートの店内放送など）

(3) その他特に丁寧な言葉遣いが要求される場で用いられる。（先方の意の「アチラサマ」など）

要するに、「サマ」は通常以上の品位を表すのに用いられるのであり、通常の品位は「サン」によって十分に表されるのである。従って「チャマ」は過度の品位と親愛感とを同時に具有する。しかし過度の品位とは、対象を離れた存在として遇することを意味し、親愛感とは両立しがたい。「チャマ」の活躍する余地はそれ故極めて狭く、「チャン」程には広く使われない。事実「チャマ」の用いられ方を考えると、次の諸点が挙げられる程度だろう。

(1) 一部の家庭で親族名称につけて用いられる。

(2) 「(オ) 坊チャマ」「(オ) 嬢チャマ」の形で稀に使われる。「一郎坊チャマ」は可能だが、「一郎チャマ」とはいえない。

(3) 老人に対して「オジイチャマ」「オバアチャマ」の形で用いられる。

5.2 オチョボグチ

これには「オツボグチ」の形もみられる。意味の同一、語形の似かよりからして、両者が各々独立に生じた可能性は考慮からはずしてよかろう。いずれが早くにあったかは、従っていずれから他の形が生じたかは、文献にあらわれた例からは断じがたい。

オツボグチ＞オチョボグチ

今仮りに、「オツボグチ」から「オチョボグチ」が生じたと仮定して、筆者の立場から説明を加えてみよう。

先に挙げた『浮世風呂』からの引用にある「徳松」にもみられる通り、幼児語ではツに対応する発音がチュにきかれもする。幼児の前では靴を「オクチュ」といったりもする。「女・子供などの小さくかわいらしい口」（日本国語大辞典「おちょぼぐち」の項）である「オツボグチ」が、その「小さくかわいらしい」印象を強めるためにツをチュに変えた語形を生みだす。オツボグチ＞オチュボグチの変化である。「オチュボグチ」の第二音節が前後の母音に同化してオチュボグチ＞オチョボグチの変化を生じた。

もしこの説明が認められるならば、チャ・チュ・チョは幼児語を経ずとも、「小さい」「可愛らしい」といった印象を強める効果をもち得ることになる。なぜならば、「オチョボグチ」が先ず幼児語として誕生したとは考えにくいからである。

オチョボグチ＞オツボグチ

現行の辞書の多くは、「オツボグチ」から「オチョボグチ」が生じたとは考えていないようだ。一例を挙げれば、日本国語大辞典では次のように記述されている。

おちょぼ―ぐち〔名〕（「ちょぼ」は小さいの意（下略）

おつぼ―ぐち〔御壷口〕〔名〕「おちょぼぐち」に同じ。（下略）

今仮りに、「オチョボグチ」から「オツボグチ」が生じたと仮定して、筆者の立場から説明を加えてみよう。

「オチョボグチ」は、「小さくかわいらしい」印象を強めるためにその第二音節をチョに変えて生まれた新しい語形と意識される。その元来の古い語形を求めようとすれば、チョとソとの対応から考えて、回帰形として候補に先ず挙げられるのは「オソボグチ」である。「オツボグチ」も何番目かの候補にはなり得る。ただ「オツボグチ」の場合には、＜御壷口＞という語構成意識、或いは「ツボム」「ツボメル」と語根を共有するという意識が手伝って、結局は「オソボグチ」が排除された。

5.3 5.2での議論が認められるならば、チャ・チュ・チョは、これらを含む語が幼児語であるか否かにかかわらず、ある特定の印象をもたらし得ることになる。

擬態語に、ここで問題にしている音節を含む語を捜すと、「コチョコチョ」「チョコマカ」「チャカチャカ」「チョロチョロ」「チョボチョボ」「ポチャポチャ」「ポッチャリ」等、こまごまとして可愛らしい、或いは小さい、わずかであるといった印象と結びつけられる語が少なくない。「チョコット」「チョコント」「チョックラ」「チョイト」「チョット」「チョッピリ」「チョビット」という副詞も挙げられる。これらの語中の拗音は、「小チャイ」のチャのようにサ行音と対応しているわけではない。ならばここで問題にしている音節は、サ・ス・ソと対応せずとも、ある特定の印象をもたらし得ることになる。

多くの辞書に従えば「オチョボグチ」の「チョボ」は「小さい」の意であるという。チャ・チュ・チョがそれ自体で――幼児語出自でなくとも、サ行音と対応せずとも――特定の印象をもたらし得ることを認めるならば、「チョボ」はその表す意味に、似つかわしい語形だといえる。

5.4 『大上臈御名之事』〈天正一七年奥書〉（以下の引用は群書類従による）には、「ちゃちゃ」「あちゃち」「あちゃ」「あちゃちゃ」といった女性名がみられる。「茶々屋の茶郎兵衛」を滑稽な名だと断定した以上は、これらの名の存在を無視しては説得力を欠こう。これらの名は上臈に対する呼び名であり、決して滑稽な名だとは認められないからである。

これらの命名にどのような感情が込められていたか、今となっては確かめる術はない。しかしその手がかりになりそうな記述がないわけではない。

一さるべき人々の召つかふべき女房のしだい。上らうおさなゝをよぶべし。たとへば。ちゃ〳〵。あちゃ。五いなどよぶたぐひ成べし。唯上らうともいふべし。

次のような箇所もある。

おさな名少々。　ちゃ〳〵。あちや。かゝ。とゝ。あこ。あか。あと。こゝ。ちやち。つま。あや。よゝ。この類なり。

これによれば、「ちゃちゃ」等の名が「おさなな」であったことが確かめられる。「おさなな」とことわるからには、通常は成人してからは用いられない名であるはずだ。それを女房の呼び名に用いるのは、愛称で呼ぶ行為に近いと考えられる。「ちゃちゃ」等の名が、幼名或いは愛称である限り、その命名に込められた感情を推測することはある程度可能である。そしてその推測はいままでの考え方を支えこそすれ、それに抵触することはないはずだ。狂言に「いちゃ」という若い女性が登場することや、現サ今「ヒコ」という名の愛称が「チャコ」となることも考えあわされる。

6

以上で筆者の主張したいことはほぼつきるが、最後に今まで意識的に避けてきた事柄に言及して結びとする。サ・ス・ソがチャ・チュ・チョと対応するならば、理のおもむくところ、シ・セはチ・チェと対応する。

3.2で挙げたA・Bの特徴はチェにもあてはまる。ただしチェの出現はほぼ外来語に限られるから、チェを考察につけ加えても、そこ

から新たに問題が発展しそうにはない。

ところで筆者はこの小論を、拗音と特定の印象とを結びつけるという観点で発展させたいと考えている。チ――その音価が［ti］であった時期は小論の対象外である――は拗音には属さないし、3,2のA・Bの特徴を具えてもいない。しかしチャ・チュ・チョを拗音と呼ぶならば、それらと頭子音を共有するチを拗音と呼ぶことは、その限りにおいて不当ではない。誤解を避けるためにいえば、ここでチを拗音に属させようと主張するのではない。チャ・チュ・チョと同様に、チが特定の印象と結びつく場合があり、それを拗音相当のチと呼びたいのである。「ヤ行のエ」という類の慣用的称呼を準用すれば、チには「タ行のチ」と「チャ行のチ」とがあるともいえる。ただし準用は準用であり、「ヤ行のエ」と全く同じ妥当性をもって「チャ行のチ」が正当化されるわけではない。

「サムイ」が幼児語として「チャムイ」に姿を変えるのに平行して、「オモシロイ」は「オモチロイ」と変わる。「オモチロイ」の第三音節を、拗音に相当するチと考えようというわけである。

「チビル（大小便を少しもらす意）」の語頭音節も拗音相当とみなし得る。この語はチの音価が［ti］であった時期にまでは文献上さかのぼれない。類義語に「シビル」があり、おそらくは「シビル」に由来する――その経過は「小チャイ」が成立する場合と全同ではなかろうが――語であろう。詳述はしにくいが、拗音相当とみなす根拠には、意味に対する考慮が含まれる。

拗音相当のチを認めるならば、5,3で挙げた擬態語群に「チマチマ」「チビ（リ）チビ（リ）」「チクチク」等を加えることができる。

ここで問題にした拗音に関しては未だ考えるべきことどもが残る。たとえば、「ビチョビチョ」「グチャグチャ」等、濁音節にこれらの拗音がついた擬態語の多くには、いかにも顔をしかめたくなるような汚なさがつきまとう。だがそれらを論ずることはこの小論の主題からすでにかけ離れている。

付記　本稿をなすに当っては小松英雄先生より種々の御教示をいただいた。未発表のお考えを数多くお教えいただいたことの恩恵は計りしれない。北原保雄先生には草稿を閲読いただいた。この稿が多少とも焦点の定まったものとなったのは先生の御指摘による。「大上羅御名之事」は森野宗明先生の御教示によって知った。記して感謝の意を表し奉る。

（北海道教育大学札幌分校）